

## デイヴィッド・トラゾフ氏による講義と演奏会—北インド古典音楽の紹介

愛知県立大学外国語学部国際関係学科  
エドガー・W・ポープ

欧米や日本では「古典音楽」(classical music)や「芸術音楽」(art music)といえは西洋のクラシック音楽が世界の基準とみなされることが多い。しかし世界の多様な音楽のなかで、西洋のクラシック音楽と同様に長い歴史を経て音楽専門家が発展させた優雅な音構成、豊かな理論的思想と美学を誇る「芸術音楽」の伝統が少なくない。インドでは大きく分けるとヒンドゥースターニー音楽(北インド中心)とカルナータカ音楽(南インド中心)という二つの芸術音楽伝統がある。

多文化共生研究所の主催で、2014年5月8日に県大の学術文化交流センターでサロード奏者と民族音楽学者デイヴィッド・トラゾフ氏による講義と演奏会が行われた。サロードとは、シタールと並んで北インド古典音楽(ヒンドゥースターニー音楽)の主要弦楽器の一つである。アメリカ出身のトラゾフ氏は、故アリー・アクバル・カーン(1922-2009)の弟子として1973年以来サロードに打ち込み、アメリカ、インド、ヨーロッパの数々の大学、音楽院、音楽祭などで公演活動を行ってきた。カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校で民族音楽学の博士号を取得しており、ヒンドゥースターニー音楽に関する研究と教育活動も頻繁に行っている。

トラゾフ氏の伴奏者としてユザーン(湯沢啓紀)がタブラという太鼓一対を演奏していただいた。ユザーンはオニンド・チャタルジーとザキール・フセインの両氏からタブラを師事しており、ヒンドゥースターニー音楽に限らず日本の音楽界で幅広い活動をしているミュージシャンである。

最初トラゾフ氏は聴衆に「聞く、観察する」ことだけに集中するようにと話し、10分ぐらいの演奏を行った。その後トラゾフ氏は短い演奏を事例として適切に入れながら講義をし、ヒンドゥースターニー音楽の楽器や音楽的概念と要素、構造、歴史などを英語で説明した(著者は通訳をした)。

以下ではトラゾフ氏の演奏と講義を参考にヒンドゥースターニー音楽を紹介する。

### 楽器

まずは音の物理的な原因である楽器の説明が必要である。演奏の際に最初に聞こえてくる音はドローン(単調な音)である。これは音楽の背景として重要な要素であり、本来はタンブーラという弦楽器によって演奏されるものである。しかし近年ではタンブーラの代わりにスマートフォンのアプリなどによる電子ドローンが使われることが多く、トラゾフ氏の演奏でも利用された。この点からインド古典音楽は伝統音楽でありながら、常に技術的な変化に対応できる伝統だとわかる。

トラゾフ氏の楽器、サロードはギターと同じぐらいの大きさの弦楽器である。胴体の上に革が張っており、革の上に四本から六本の旋律弦がコマを通過して棹に繋がっている。奏者は右手でピックを持ち旋律弦を弾き、左手ではフレットの無い金属の指板に弦を抑える。フレットの無い指板に指を自由に滑らせるので、旋律に微妙な滑り音や装飾音を加えることができるのがサロードの一つの特徴である。旋律弦以外にも旋律の音に共鳴する複数の共鳴弦があり、そのために旋律の周りに複雑な音色が広がる。

ユザーンが弾く伴奏打楽器はタブラ(右手の太鼓)とバヤン(左手の太鼓)のセットであり、その太鼓一対は一般的に「タブラ」という。タブラはだいたい木製の胴体、バヤンは金属製の胴体が主流だが、いずれも革が張っており、さらに革の上には黒い丸の鉄の粉とノリでできたものが貼り付けてある。革の部分と黒い丸の部分のどこで叩くか、どの指でどう叩くかによって多様な音色をだすことができる。

## 音の要素

声楽がインド古典音楽の中心だと考えられており、楽器による演奏でも音を身体の内部から作り出し、楽器を通して「歌う」とされている。音楽のすべての音を発声と身体動作で表象することができる。楽器の音や音階の音高を表象するシラブルの制度が特に重要であり、楽器で演奏できるあらゆる音をシラブルによって口で表現することもできる。

### a) 旋律の要素

#### (1) 音階

ヒンドゥースターニー音楽で利用される基本的な音階は西洋の長音階と同じ七音音階である。西洋音楽のソルフェージュ (solfege)、すなわち「ドレミファソラシド」と同様に、インドでは「サレガマパダニサ」というシラブルを階名として使われている。この階名制度はサルガーム (sargam) という。

数字：	1	2	3	4	5	6	7	1
西洋：	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	シ	ド
インド：	サ	レ	ガ	マ	パ	ダ	ニ	サ

西洋音楽における絶対音高の制度と違ってインドの音楽は相対音高の制度であるので、主音「サ」の音高は楽器や歌手の声に合わせて定められ、他の音高は「サ」との音程関係によって決定される。(この点は西洋の「移動ド」と似ている。)「サ」と「パ」(主音とその上の完全五度)は必ずそのままの音高だが、それ以外の音は派生音となることがある。とりわけ「レ」か「ガ」、「ダ」、「ニ」は普通より半音低い(変)派生音、「マ」は普通より半音高い(嬰)派生音として使われることがある。

西洋のソルフェージュと違って、インドのサルガームによる階名唱法は訓練だけでなく実際の声楽演奏でも一つの歌唱法としてよく利用されている。

#### (2) Raga ラーガ (旋律の枠組み)

ラーガはヒンドゥースターニー音楽における即興演奏と作曲のための枠組みとして利用される旋律形態である。多数のラーガが存在し、それぞれのラーガには名前と音楽的な特徴がある。各ラーガの基本的な音階は前述した七音音階とその派生音の中から選ばれたいくつかの音からなる。たとえば「バイラヴィー」というラーガの音階では「サレガマパダニサ」の音を全て利用するが、「レ」「ガ」「ダ」と「ニ」の音は半音低い(変)の派生音となる。また、上行の音階と下行の音階が異なるラーガもある。そして典型的なフレーズや各音の扱い方、どの音を強調するか、どの音を延ばすか、どの音にどのような装飾音を付けるか、などという特徴によって各ラーガの音楽的性格が形成される。

ラーガの本来の意味は「心を彩るもの」であり、各ラーガはその音楽的な特徴を通して特定の情動的効果を果たすものだといみなされている。大部分のラーガに関してはそのラーガを演奏するにふさわしい時間帯が決まっており、曙のラーガや午後のラーガ、夕方のラーガ、深夜のラーガなどがある。また、あるラーガには季節が決まっており、例えば雨季のラーガが存在する。各ラーガはその時間帯か季節の雰囲気合っている音楽的表現だとされている。

### b) リズムの要素

#### (1) Bols ボール

「ボール」とは太鼓の口唱歌(くちしょうが)を意味する。ヒンドゥースターニー音楽で一般的に使われているボールはタブラのさまざまな音を意味する「タ」「ナ」「ティン」

「ディン」「ダ」などのシラブルである。タブラで演奏できるあらゆる音やパターンをボールによって声で朗唱できる。

## (2) 曲・パターン

タブラの様々な音を組み合わせることによって作曲することができる。タブラ奏者は曲やパターンを数多く記憶しており、演奏の際にそれを利用して即興演奏をする。タブラ独奏の曲をボールとして朗唱し、その後タブラで演奏するという演奏形式もある。

## (3) Tala ターラ (リズム周期)

ターラとはヒンドゥースターニー音楽で利用されるリズム周期を意味する。ラーガは基本的な旋律概念であると同様に、ターラは基本的なリズム概念だといえる。最も頻繁に使われるターラは 16 拍子のティーン・タールだが、7 拍子のルーパク・タール、10 拍子のジャープ・タールなど多数のターラが存在する。演奏の際にターラを保持する責任は主にタブラ奏者にあるが、両方の奏者がターラに沿って演奏し、それぞれの即興演奏は必ずターラの一拍目に終わる。各ターラにはテーカーという典型的なタブラのパターンがあり、それをボールのシラブルでも朗唱できる。例えば以下はルーパク・タールのテーカーである。

|: 1        2        3    | 4        5    | 6        7    :|  
|: ティン   ティン   ナ   | ディン   ナ   | ディン   ナ   :|

## 演奏の構造と展開の仕方

ラーガの演奏は一般的にアラープという自由リズムの前奏で始まる。アラープは旋律楽器奏者（あるいは歌手）の独奏であり、奏者はドロンの伴奏だけでラーガの特徴を表現しながら即興演奏をする。音域の中心から始め、音域を徐々に広げながらラーガの音と各音の扱い方、典型的なフレーズなどを次々に表示する。フレーズの複雑さ、旋律要素の数と密度を徐々に上げていく。アラープはクライマックスに至って終わったら、旋律楽器奏者は決まった旋律でターラのリズム周期による演奏を開始し、タブラ奏者も演奏に入る。その時点からターラに合わせて旋律楽器とタブラによる対話的な演奏が展開される。その大部分は旋律楽器による即興演奏が中心になっており、アラープと同様に音域を徐々に広げながら音楽要素を増やし、その複雑さや密度を徐々に上昇させる。旋律楽器が即興演奏をする時にタブラは簡単なパターンでターラを保持し、逆にタブラが即興演奏をする時に旋律楽器がターラを保持するための簡単な旋律を繰り返す。ターラのリズム（テンポ）が徐々に上がり、最後に非常に早いテンポのクライマックスに至って演奏が終わる。

## ヒンドゥースターニー音楽の歴史と現状

ヒンドゥースターニー音楽はグル（師匠）とシシャ（弟子）との関係における直接指導によって過去から伝承されてきた。記譜されたサルガームは教材などとしてある程度使われているが、基本的に口承伝統である。現在は音楽大学などでも教授されているが、伝統的なグル・シシャ制度は現在でも大事に守られている。数多くのグル・シシャの系譜はいくつかのガラーナ（流派）に分けられている。各ガラーナのなかで独自の演奏スタイルや技法が代々受け継がれている。

しかしヒンドゥースターニー音楽は永遠に変わらない遺物ではなく、常に変化しながら受け継がれてきた伝統である。2000 年以上前から継続的に利用されてきた要素はあるが、現在の形式で演奏されるのは 200 年ぐらい前からであり、サロードという楽器は現在の形になったのはわずか 80 年ぐらい前のことである。昔頻繁に演奏されたラーガが現在演奏されなくなった場合もあるし、新しいラーガが造られることもある。演奏のコンテクスト

や場所も長い歴史を経て、ヒンズー教の寺院から貴族の宮廷に、宮廷からコンサートの舞台に変化してきた。トラゾフ氏とユザーン氏の演奏で聴かせてもらったヒンドゥースターニー音楽は「昔」の音楽ではなく現代音楽であり、長い歴史を誇る伝統の現在の表現形式である。